

## 外間守善先生と沖文研と私

マミヤ, アツシ / 間宮, 厚司

---

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

42

(開始ページ / Start Page)

13

(終了ページ / End Page)

17

(発行年 / Year)

2015-03

## 外間守善先生と沖文研と私

間宮 厚司（沖繩文化研究所兼担所員）

二〇一二年一月二〇日、外間守善先生は肺炎のため、お亡くなりになった。享年八七歳。私は、翌二一日の午前  
に沖繩文化研究所の屋嘉所長から電話で訃報を知らされた。

先生は一九二四年二月六日の生まれなので、米寿を迎えられる直前だった。先生は同じ那覇市の出身で沖繩学の  
父と言われる伊波普猷の後継者を自任し、沖繩の古代歌謡集『おもろさうし』の校本・辞典・総索引・全訳を主軸  
に、多岐にわたる沖繩学の普及と発展に尽力された。

先生は、構想力と実行力を合わせ持つ研究者で、沖繩学を体現されたが、戦中は沖繩師範学校在学中に沖繩戦に動  
員され、銃弾を浴びながらも奇跡的に助かった。そのときの体験については法政大学国文学会『日本文学誌要・第51  
号（外間守善教授御退職記念特集号）』（法政大学国文学会、一九九五年）所収「講演」南の島の心」の中で、先生  
御自身、次のように語っていらっしやる。

\* \*

そういうような戦線の混乱があったために沖繩方面軍司令部から熊本の方に私の戦死公報が六月に入ってい  
たんだそうです。大分県は佐賀関半島に神崎という小さな村がありますが、そこに私の母親と姉が疎開している  
ところへ戦死公報が届きまして、私は大分県神崎村の教尊寺というお寺さんで葬式までされているんです。私は

一度あの世に行っているわけなんですわねえ。しかし、生きながらえたあとで、東京からわざわざ母親を連れて教尊寺まで行きまして、「私は生きて帰りました」ということを報告して私の甲いの取り消しをしてもらいました。甲いの取り消しをしてもらおうという経緯、普通の人にはまずないだろうと思います。

この沖繩戦で九死に一生を得ていなければ、法政大学に沖繩学の講座は実現せず、沖繩文化研究所も設立されることはなかったに違いない。戦後、先生は國學院大學で島崎藤村の研究をするつもりだったが、金田一京助先生の勧めで、「琉球方言文法論」の研究で卒論（金田一先生は最高の点数をつけた由）を提出され、卒業後は東大の研究生として服部四郎先生に師事され、本格的に言語理論を学ばれた。

そして、法政大学には西尾実先生の後任として、日本文学科に招かれることになったが、そのときの経緯については、『日本文学誌要・第51号』（法政大学国文学会、一九九五年）の「〈巻頭言〉外間守善と法政大学」で、小田切秀雄先生が次のように詳しく記されている。少し長くなるが、紹介したい。

\* \* \*

一九六六年の秋だったろうか、沖繩に戻っていた外間守善が上京してきたこと、然るべきところがなくて和洋女子大に勤めていることを聞いた。わたしは外間のものをいくつか読んで、たいへん敬服していたし、たまたま西尾実の後任として国語学の教授をひとり招かねばならず、物色を続けていた時だったので、人からも信頼できると聞いていたこの外間ならふさわしいのではないかと思ったが、まず古代の専門家の判断も聞いてみねばならぬし、和洋女子大にたいしても就職したばかりのひとを引抜くことは、道義的に許されぬことかもしれぬという心配があった。わたしはまず西郷信綱に電話して、外間という人物の仕事は専門の古代文学研究者のあいだではどう評価されているか、西郷としてはどう思うか、とたずねたら、外間は新しいタイプの沖繩学者の代表的な存

在で、国語学・方言学の上でも作品の文献学的また文学的な取扱いの上でも、かれは最も進んでおり、そういう評価は定着しつつある、ということ、まことにわが意をえた返事だった。念のためもう一人、古代史学者の石母田正に聞いてみたら、外間は国宝的な存在だ、西郷君のいう通りで、これをのがすてはない、といった。わたしは自信をもって日本文学科にこの人事を提案し、このときは珍しくすんなりと了承されたので、さっそく外間に連絡をとり、会うことになった。和洋女子大とは特別な義理合いはない、との答えでさきの“道義的”な心配がまず消え、それならば、沖繩方言と沖繩文学の専門家としての貴君の力を發揮するのに比較的いい条件をもつ法大日本文学科に来てくれないか、と、文字通りに“要請”したところ、かれはそういう要求があった場合のことを考えぬいてきていたらしく、原則的に承諾という返事をもらうことができた。外間との深く長いつきあいはこの時からじまった。

先生は、「沖繩学」に関する講座を法政大学と東京大学に、その後、國學院大学と学習院大学に開設なさり、『おもしろさうし』や「琉歌」を中心に多くの学生が、熱心に先生の講義に耳を傾けた。それがやがて、「沖繩文化研究所」の創設へと向かった。先生の『回想80年 沖繩学への道』（沖繩タイムス社、二〇〇七年）の中に、その当時のことに関する文章があるので、引用（一八四―一八五頁）しよう。

\*

\*

この頃から私の心の中には研究分野としての「沖繩学」を何とかして確立したいとの思いが芽生えていた。法政大学は当時の大学としてはめざらしくリベラルな校風だったので、そうした私の思いを実現させるには恵まれた環境であったといえよう。私は、日本で初めての沖繩文化研究所を法政大学に創設するために奔走した。まず、私が企画書を作成し、小川徹教授と二人で中村哲総長に直訴した。折よく、中野好夫先生の沖繩資料センターを

閉鎖するので法政で文献の管理をひき受けてくれないかという話が沖縄タイムスの由井晶子さんを通じて持ちこまれた。私はすぐに中野先生を訪ねて詳細をうかがった。無償でよいが、文庫を一般にも開放し、できたら中野文庫のために人を一人採用してほしいといわれた。人事権は私にはないのでその場では、大学と交渉し、ゆくゆくはそういう方向で考えたいと申し上げた。そのことを含めて中村総長に話したらたいそう喜んでくれた。

総長は沖縄を軸にして南方地域にも研究を広げたほうがよいという考えだった。また、学務理事は現代の沖縄問題の研究も視野に入れたほうがよいという意見だった。いずれにしても沖縄文化研究所創設に好意的な助言ばかりであったことに私はほっとした。さまざまな意見はあったが、私は当面、人文科学を中心にした研究所にし、足場がしっかりしてから拡大したほうがよいと答えて、その通りの沖縄文化研究所が一九七二（昭和四七年）一月一日に発足した。

中村先生はお礼だといって油絵を描いて中野先生に差し上げた。中野先生宅に私が持参したら、「ほうッ、中村君は絵も描くのか」といわれた。両傑物のおもしろいやりとりだった。法政沖文研誕生のエピソードとして書き添えておこう。

沖縄文化研究所創設の資金として法政大学は一〇〇万円出してくれ、港区の一の橋というところにあつた大学の古いビルの小さな部屋を与えてくれた。同じ建物の中には能楽研究所などもあり、狭いながらも「沖縄学」が少しずつ市民権を得つつあるのを感じることができた。二年めからは文部省に研究補助金を申請し一千万円の助成を得た。文部省の科学研究費を得たことによって研究所の活動は一気に広がりを見せた。ことに、久米島や久高島の調査を数年かけて集中的に行えたことは後の沖縄研究の基礎固めとして大きな収穫だった。

以上、先生の戦争体験、法政大学文学部日本文学科への着任、沖縄文化研究所の創設と、時間の流れに沿って記し

た。なお、引用文が多くなった点は、お許しいただきたい。ただ、こうした歴史について、若い世代の人たちは知らないと思い、所報に書いておくことは、意義のあることと判断した次第。

ところで、先生との出会いは、私が学習院大学の三年生の一九八一年、三〇年以上も前のことになる。当初は東大の築島裕先生の訓点語の授業を履修する予定だった。これは大学院と学部三年以上の共通科目で開講時に出席したところ、私以外は全員大学院生で授業後に院生数人に囲まれ、「学部生は君一人だね。レベル的に大丈夫かな。履修しないほうが良いのでは……」とプレッシャーをかけられたため、時間割を見直して、翌週から外間先生の琉歌演習を履修することに変更した。幸運にも座席に若干の余裕があり、先生は快く受講を認めてくださった。私の指導教授は、大野晋先生であるが、三年後期の卒論を決める大事な時期にタミル語の研究のため、一年間インドへ。卒論を何で書こうかと迷っていたそんな折に、「まだ十分に解明されていない、『おもしろさうし』の係り結びを研究してみる気はありませんか」と、外間先生に勧められ、『おもしろさうし』に見られる係り結びの現象を奈良・平安時代の大和の係り結びと比較した卒論を書き、大学院の修士課程に何とか進学した。また、先生には月例会の「おもしろさうし研究会」に誘っていただき、沖縄文化研究所の国内研究員に加えていただいた。修論は『おもしろさうし』の表記に関する内容で作成し博士課程へ。そして、一九八七年に鶴見大学文学部の専任講師になり、そこで八年間勤めた後、一九九五年に外間先生の後任として、日本文学科（文学・言語・文芸の三コース制開始の年）に日本語学のプロパーとして迎えていただいた。もしあの時に先生の演習を履修していなければ……。

私は、『おもしろさうし』や「琉歌」の学灯を消すことなく、守り続けなければなりません。はなはだ非力ではありませんが、精一杯努力する所存です。

先生の学恩に感謝するとともに、ご冥福をお祈り申し上げます。先生、ありがとうございました。

（沖縄文化研究所所報第73号より転載）